

フェリックス・メンデルスゾーン・バルトルディは1809年2月にドイツのハンブルグで生まれのユダヤ人で、今年がその生誕200年にあたります。

裕福な銀行家の息子として生まれ、若くして音楽の才能を発揮、少年時代に文豪ゲーテと知り合いだったり、彼のコンサートには哲学者ヘーゲルや詩人のハイネが聴きにきたりと、その生涯は華々しいものでした。メンデルスゾーンの作るメロディは生き生きとしてセンスのよいものが多く、きっと若かりし頃は「爽やか好青年」だったのでしょう。

また作曲家以外の活動としては、それまでの音楽家は自作の発表をメインに活動していたのですが、メンデルスゾーンは作曲者の死後永く忘れられていた J. S. バッハの「マタイ受難曲」やベートーヴェンの交響曲を再演したり、シューベルトの遺作交響曲「グレート」を発掘・初演したりと、現在の指揮者の活動基盤を作った人でもあります。

彼のお姉さんもピアノ演奏や作曲の才能があったそうで、残念ながら当時は女性が作曲のような創作活動をあまり好意的に考えない風習があり、お姉さんのいくつかの曲は弟の作として出版されたとききました。

38歳という若さでその生涯を終えたというと病弱なイメージがありますが、死の前年までは活動的な人で、良き理解者であった姉の死をきっかけに体調を壊し、直接の死因はクモ膜下出血だったそうです。

メンデルスゾーンほど死後多くの迫害を受けた作曲家はいなかったのではないのでしょうか。死の3年後ワーグナーはメンデルスゾーンがユダヤ人であることを理由に音楽の芸術性を否定する論文を書き、ナチス・ドイツの時代にヒトラーはメンデルスゾーン銀行を解散させ、マーラーなどとともにユダヤ人作曲家の曲の演奏をすべて禁止させました。芸術に対して今後決してそのような悲劇が起きないことを、そしてメンデルスゾーンの曲が生誕200年を機会にさらに多くの人から愛されることを切に願います。

劇音楽「真夏の夜の夢」より 序曲、間奏曲、夜想曲、結婚行進曲

「17歳の時の曲なんだあ」。別にメンデルスゾーンと張り合う気持ちはこれっぽっちもなかったのですが、私が序曲を始めて聴いた高校生の時、レコードジャケットの解説を読んで、正直とっても大きなショックを感じたのを今でも忘れられません。これがモーツァルトなら決してそう思わなかったでしょうに。

誤解されては困るのですが、これは決してメンデルスゾーンを軽んじて言っているわけではありません。当時の私には、素晴らしい芸術や仕事は苦勞や障害といった逆境を乗り越え勝ち得るというイメージがあり、その代表格がベートーヴェンであり、天才モーツァルトも幼少の頃から父親にまるで猿回しの猿のようにヨーロッパ中を引き回され、

それによって当時の最先端の音楽に触れることができたわけで、それに対してあまりにも恵まれすぎていたメンデルスゾーンの生い立ちに対する嫉妬のようなものが私の中にあっただけなのでしょう。

この序曲は完璧ともいえる構成力と劇中のさまざまな情景や妖精などのキャラクター表現にあふれ、一見意味もなくポツと吹かれる木管楽器の1つの四分音符が無限に広がる不思議な力をもっています。

のちにこの序曲はプロシャ王の知るところとなり、感銘した王は曲を加えて劇用音楽するように命じました。残りの曲はメンデルスゾーン34歳の作です。

「真夏の夜の夢」はシェイクスピアの喜劇で、4人の貴族の男女による相思相愛を含む四角関係を丸く収めようと、いたずら妖精パックが惚れ薬「恋の三色スマレ」をつかっただの大騒動劇です。「真夏」といっても原題の“Midsummer”とは夏至のことで、現在ではそれもあって「夏の夜の夢」としばしば訳されています。

2曲目の間奏曲は相思相愛の相手を探す娘ハーミアの様と、続く第3幕に登場し結婚式でおかしな劇中劇を披露する職人たちが登場するシーンの2つの部分からなっています。

続く夜想曲は第3幕の終わりで、4人の男女がパックの人違いにより大騒ぎしたすえ疲れ果てて森で寝てしまうシーンです。パックは改めて惚れ薬を男の瞳にたらしめます。

最後は第5幕で2組のカップルの結婚式で使われる有名な結婚行進曲。ワーグナーの婚礼の合唱とともに結婚式ではよく聴かれます。ワーグナーのそれは歌劇「ローエングリン」で輝かしく勇猛な第3幕の前奏曲のあとに続く、騎士の高貴さと花嫁の無垢さを現したもので、花婿の白鳥の騎士ローエングリンの花嫁エルザのがはじめて二人きりになるシーンに続くおごそかな曲なのに対し、メンデルスゾーンのこれはファンタジーあふれるこの喜劇にふさわしい明るい曲です。

ヴァイオリン協奏曲 ホ短調

「この曲の出だして、モーツァルトの40番に似ていませんか？」先日練習前に当団ヴィオラの重蔵さんにそう問いかけたらすぐに賛同をいただきました。テンポも共に Allegro molt で心を揺さぶるような八分音符にのってアウフタクトで始まるヴァイオリンのメロディ。始めの5秒を聴けばクラシック音楽ファンでなくても耳になじんでいるこの2つの名曲に私は不思議なつながりを感じます。

曲は速い-ゆっくり-速いの3つの楽章が中断なく続けられ、第1楽章と第2楽章のブリッジには情熱的な気分の余韻から優美なメロディを引き出すようなファゴットの持続音が、第3楽章の冒頭では独奏ヴァイオリンがそれまでを再び振り返り語り掛けるようなフレーズが挿入されています。

ドイツはライプチヒのゲバントハウス管弦楽団で当時常任指揮者の地位にあったメンデルスゾーンはコンサートマスターのダーヴィトから依頼された曲で、ロンドン公演など多忙な中、6年後35歳のときによりやく完成、それでもメンデルスゾーンは満足せず翌年に改定、まさに天才メンデルスゾーンの渾身の作です。本日は2005年に出版された新全集の第2版で演奏いたします。

どうぞみなさん、2008年日本音楽コンクールで第1位の栄冠を受けた瀧村依里さんの音楽を存分にお楽しみください。

交響曲第5番「宗教改革」

ユダヤ人はユダヤ教じゃないんだらうか？なんで「宗教改革」なの？っていうのが私の最初の疑問でした。調べてみるとメンデルスゾーンのお父さんはキリスト教に改宗し、バルトルディとはそれを意味するべくお父さんがつけた名字だそうです。メンデルスゾーン自身も敬虔なルター派プロテスタントで、この曲は「マタイ受難曲」（バッハもプロテスタントです）の再演の翌年21歳のときに、アウグスブルク信仰告白300年祭に演奏する目的で書いた2番目の交響

曲です。残念ながら、理由は定かではないのですが、300年祭には演奏されず、出版も遅れ第5番という番号がついています。

第1楽章は厳かなメロディのイントロの中にヴァイオリンによる聖なる上行音型が印象的に現れます。これはプロテスタントの礼拝で使われる「ドレスデン・アーメン」とよばれるもので、ワーグナーも楽劇「パルジファル」で聖杯の動機として使っています。続くテンポの速い部分は威厳があり、決して暴力的でない力強さで、プロテスタントの語源が反抗する、抗議する（プロテスト）であることを思い出させます。**第2楽章**は打って変わって素朴で楽しいスケルツォ。ブリュッゲルの絵画「農民の踊り」を見るようです。**第3楽章**は導入曲的な短い楽章です。続く楽章でルター作曲のコラール「神はわがやぐら」を演奏するための夜の祈りのような気分を私は感じます。その**第4楽章**はまさに宗教改革を讃えるような高貴で威厳のある音楽が次々と展開され、最後は全員合奏で「神はわがやぐら」を高らかに歌い上げます。本日は今年出版された新全集の楽譜で演奏いたします。